

# テレビが描いた韓国・朝鮮——1970年代・80年代のドキュメン タリー番組を中心に——（2013）

## A Study of the Portrayal of Korea in Japanese Television —— Focusing on Documentaries during the 1970s and 1980s(2013)

丁 智恵  
Jihye CHUNG

東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻  
The University of Tokyo, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

要旨・・・本研究は、戦後長い間、日韓両国の「公的な記憶」から排除され、学校教科書や公立の資料館などにおいて存在が語られることのなかった、植民地主義の被害者たちが日本のテレビの中でどのように表象されてきたのかの変遷を問う。今回は、テーマが多様化し番組数が増え始めた1970年代と80年代のドキュメンタリー番組に焦点を当てる。

キーワード テレビ・ドキュメンタリー、韓国・朝鮮、メディア、歴史

### 1. はじめに

「公的な記憶」から排除された被植民者たちの存在は、テレビなどのマスメディアの中で、誰によって、何のために語られ、人びとにどう記憶されてきたのか——。戦後日本において、植民地支配の被害を受けた韓国人の日本軍「慰安婦」、被爆者、BC級戦犯、また在日韓国・朝鮮人の存在は、「公的な記憶」(Gluck, 2007: 356-358)から排除されてきた。そして、今も続く日本と周辺諸国の間で起こる歴史論争は、戦争を知らない世代がテレビなどのマスメディアを通じて形成した集合的記憶(Halbwachs 1950=1989)の相違から生じている部分も多く、今も平行線を辿っている。しかし、ここでは、過去についての特定の表現がどこまで“真実”かを議論するより、人びとが過去の意味を創造するプロセスの“真摯さ(truthfulness)”を検討評価することが有益である(Morris-Suzuki, 2005=2004: 34)という立場に立ち、私たちに歴史を伝えてきたテレビを始めとするマスメディアのあり方を検証するものとする。

これまで、劇映画や小説における韓国・朝鮮人の表象についての研究は少なからず行われてきた<sup>1</sup>が、テレビに関しては、これまで過去の番組のアーカイブの大多数が学術利用することが出来ず、非公開であったため、テレビ史全体を視野に入れた上で実際のテキストに踏み込んだ先行研究は数少ない。ところが近年、テレビ研究を取り巻く学術的環境は大きく変化し始めている。デジタル技術やインターネットの発展などの技術革新がその収集や利用の手段を変え、専門家によって著作権や肖像権などの法的問題に関する議論も進みつつあり、これまで未踏の地であったテレビに関してアーカイブ的視野からの研究が実現しつつある<sup>2</sup>。

### 2. 研究目的

本研究の目的は、1970年代から80年代にかけて放送されたNHKや民放のドキュメンタリー番組が、公的記憶から排除されてきた韓国・朝鮮の植民地主義の被害者をどのように取り上げてきたのか、その変遷を問うことである。テレビがつくる言説空間の中では1970年代から80年代にかけて、韓国・朝鮮に関する植民地支配や戦争被害に関する語りが増加した。その背景には、ベトナム反戦運動の動きや、グローバル化・国際化やアジアの民主化、在日韓国・朝鮮人の定住化、テレビの海外取材網の拡大、作り手のジャーナリストとしての熱意や創意工夫など、さまざまな要素が関連している。ここでは、困難な状況の下でも、与えられた条件の中で可能な限り社会批判的な作品を制作し、人びとの思考や記憶に大きな影響を与えてきた作り手にも焦点を当てることにより、表象の裏側にある背景についても重層的に分析することを目指す。そして、これまでに存在しなかった、

<sup>1</sup> 高柳俊男『映像にみる在日朝鮮人』(1997)、林相珉『戦後在日コリアン表象の反・系譜：「高度経済成長」神話と保証なき主体』(2011)など。

<sup>2</sup> 2009年からNHKアーカイブスの学術利用トライアル研究が開始し、テレビ・アーカイブを利用した研究が進みつつある。

韓国・朝鮮の表象に関連する大規模な番組目録を作成し、整理することにより、アーカイブを通じた俯瞰的な視点で、発話の主体の変化や、そのテーマの変遷にも注目しながら、この問題を捉えることを試みる。

### 3. 研究方法

今回研究対象とするのは、1970年代と80年代に制作され放送されたドキュメンタリー番組のうち、韓国や朝鮮をキーワードとして抽出したものが中心である。NHKの番組に関しては、NHKと東大の共同研究に参加し、NHKアーカイブスが保有する膨大な放送資源(番組数約70万、ニュース項目490万)のデータベースを活用し、実際の番組を視聴することにより分析を行った。民放は、放送ライブラリーや川崎市市民ミュージアム、その他民間の大小さまざまなライブラリーの資料室を利用して目録を作成し、閲覧・視聴が可能なものに関しては実際の番組を視聴した。ここでは、この目録をもとに、この時代に作られた番組数やテーマの変化について注目し、韓国・朝鮮に関連する具体的な番組をいくつか抽出し、内容の分析や作り手へのインタビューを通じて、そのイメージや表象、作り手の思考の変化についても論じる。

さらに、時代背景や政治経済的状况の影響や、作り手たちの思考や創意工夫などについて考察するために、番組制作者へのインタビューを行なう。オーラル・ヒストリー史料の最も大きな強みは、人生における異なった領域に関連させる可能性があるということである。作り手のそれぞれの語りは、その役職、所属、放送局、あるいは年代や階級などの様々な経験を描き、日本の戦後のテレビ・ドキュメンタリー史を語る上で必要な一連の出来事を縫い合わせるための重要な糸を提供してくれる(Thompson, 2002=2002: 464)。また、この時代の作り手はすでに高齢でインタビューが困難であったり、連絡を取ることが不可能であった場合も多々あったが、その場合は放送文化研究所などに所蔵されているインタビューを収録した映像資料や、当人が執筆した記事や講演録、インタビュー録なども参考とした。

### 4. アジアへと広がる視点

この時代、さまざまなメディアにおいて少しずつアジア・太平洋戦争での加害者としての視点が言及されていった。そのひとつの契機が、60年代後半から続いていたベトナム反戦運動である。アジア・太平洋戦争を振り返る上で、この運動とそれをめぐる社会の動きは、ドキュメンタリーの作り手の意識や現場の雰囲気にも大きな転換をもたらした。テレビに映し出されるベトナムの戦火は、かつての空襲下の日本を思いださせたのと同時に、後方支援を行なっている現実の日本をも浮かび上がらせ、戦時下の加害責任・戦争責任を問いただそうとする動きを生み出したのだ(福間, 2006: 304)。日中国交正常化前年の1971年に朝日新聞に連載された本多勝一の『中国の旅』は、日本人の加害責任に言及しており、アジア・太平洋戦争を中国大陆での出来事としてあらためて見据え、その加害性を認識させるうえで大きな影響力を与えた(成田, 2010: 215)。また、森村誠一の『悪魔の飽食』は、関東軍防疫給水部第731部隊が「3千人の捕虜を対象に非人道的な生体実験」を行い、「細菌兵器の大量生産」を急いでいたことを明らかにする元隊員たちの証言と資料の提供をもとに部隊組織のありようを解明した。テレビにおいても、中国での日本軍の加害に迫るドキュメンタリー番組が制作された<sup>3</sup>。

戦後の文学、映画などの中では、この時代までは前線に赴いた日本兵など、男性の視点から語られることが多かったが、70年代頃から日本人女性たちが、戦後史や引揚げについて語り始めた。銃後にいた女性たちの戦争体験の語りも、テレビ・ドキュメンタリーの中に登場した<sup>4</sup>。また、1972年に「本土復帰」した沖縄の人びとにとつてのアジア・太平洋戦争に関する語りもこの頃から現われ始めており、大江健三郎による『沖縄ノート』(1970年、岩波書店)は、太平洋戦争末期の沖縄戦における集団自決などに言及した。テレビでも、沖縄のひめゆり部隊や、沖縄の戦争被害に関するドキュメンタリー番組が放送されるなど<sup>5</sup>、沖縄の問題が取り上げられるようになってきた<sup>6</sup>。

さらに、日本が帝国主義と植民地主義を拡大する中で占領した南洋諸島の人びとの語りも現れ始める(『ルポルタージュにつぼん 私たちが生きた島は・・・～サイパン高等学校同窓会～』(NHK:1979)など)。この番組の中では、日本人女性が戦争体験について語るのみならず、現地の人びとのインタビューを多用することにより、アジアの被害の実態が見えるようになってい

<sup>3</sup> 吉永晴子ディレクターによる『魔の731部隊』(BS:1975年)や、『戦犯たちの中国再訪の旅』(RKB毎日:1978年)などである。

<sup>4</sup> 『特集 女たちの旅路(終戦記念日)』(NHK:1976)

<sup>5</sup> 『ドキュメント79 ひめゆり戦史・いま問う国家と教育』(日本テレビ:1979)、『ドキュメント79 広島戦争展・ある"在日沖縄人"の痛恨行脚』(日本テレビ:1979)など

<sup>6</sup> ドキュメンタリーにおける沖縄の表象については、七沢潔『記録された沖縄の"本土復帰"「一同化」と「異化」のはざままで』「放送メディア研究8」(2013年、丸善プラネット)などの研究がある。

る。この時代には、語りの主体が日本人男性から女性、アジアの呼びとへと広がっていき、その複数の声から、重層的に戦争や植民地問題が再認識されていった。

## 5. 「転換期」を迎える韓国・朝鮮に関するドキュメンタリー

この時代には、韓国・朝鮮に対するかつての植民地支配や、戦争被害に関する声が現れ始める。70年代に入ってから、被爆者、強制連行、浮島丸爆沈事件や、在日コリアンのアイデンティティ、差別問題などがNHKや民放のドキュメンタリーで取り上げられる。80年代に入ると、さらに本格的に、在日コリアンの差別問題や、韓国からの密入国者の問題、また戦後補償問題についても多様なテーマが見られる。この時代は、高度経済成長の躍動的な空気の中で、社会批判的なメッセージをもつドキュメンタリーはその手法や制作体制、編成などが見直され、ゴールデンタイムの放送はワイドショーにやバラエティなどに座を奪われた。『テレビ・ルポルタージュ』(1972-78:TBS)や『ドキュメンタリー現代』(1970-75:テレビ朝日)など、社会派のドキュメンタリー番組が次々と姿を消していき、ドキュメンタリー番組は、深夜枠や地方局に追いやられていく。しかし一方で、ワイドショーやバラエティの色彩の強い『11PM』(1965-1990:日本テレビ)のような番組において、時おり硬派なテーマが取り上げられ、朝のモーニングショー、『おはよう広場』(1981-83:NHK)などでも先鋭的なテーマが取り上げられた。この時代に、ドキュメンタリー番組は、深夜や早朝、あるいは地方局へと周縁化されてしまったが、その地域性を活かしたり、あるいは主婦、子ども、サラリーマンなど、対象を明確にした編成の工夫がなされ、その枠組みの中でまた多様な語りを生み出していった。

この時代にしばしば現われ多様な角度から取り上げられるようになった韓国・朝鮮にまつわるテーマとしては、被爆者問題、「慰安婦」問題、在日の問題などがあげられる。以下においては、これら3つのテーマについて取り上げた具体的な番組の内容を検討していく。

一つ目の韓国・朝鮮人被爆者に関しては、60年代後半頃からTBSの『マスコミQ』の中で「街頭録画・原爆スラム」(67年)、「ある密入国者・韓国人被爆者孫貴達」(68年)などで取り上げられ始めた。NHKのドキュメンタリー番組の中で始めて本格的に韓国人被爆者の問題を取り上げたのは、『NHK特派員報告 埋もれた26年～韓国原爆被害者』(1971.8.10:NHK)である。この番組の中では、当事者である韓国人被爆者が数人登場し、反核集会などで行動する姿が映し出され、また韓国国内にも取材を行っている。また、先述の朝のモーニングショー「おはよう広場」(NHK:1980-1984)の中でも、『女が語る・戦争を生きた女たち』(1981-1983)というシリーズが夏休み特集として企画され、子どもや主婦を対象に放送された。このシリーズの「筑豊・たったひとりの被爆相談所」(1981.8.4)という回では、筑豊炭坑の周辺に住む韓国人被爆女性が取り上げられている。そして、その後継番組「おはようジャーナル」(1984-1991)の中でも、『戦争を知っていますか 子供たちへのメッセージ』というシリーズが同じく夏休みに放送され、「幸福守 私も被爆者です」(1989.8.3)の中で、韓国人被爆女性が登場した。これらの番組に登場する被爆者たちは、始めの頃は被爆治療のため「密入国」したり、反核集会で演説する行動的な人物であったが、後には普通の暮らしをしている女性へと移行しており、それまで不可視的存在であった、無名の被爆韓国人女性の存在に作り手の視点が広がったといえる。

次に、「慰安婦」問題については、91年の金学順のカミングアウトに10年以上も先立つ70年代後半頃から、この問題はドキュメンタリー番組に登場していた<sup>7</sup>。この時代には、千田夏光によるルポ(1973)や、元労務報国会動員部長吉田清治の告白手記(1977)などが刊行され、この問題について各方面から追究され始めていた。80年代に入ると、日本テレビの『11PM』は、「シリーズ・アジアと共に生きる」(1982.1.11-3.8)の中で、「日帝36年」、「在日韓国・朝鮮人」、「韓国から見た日本」など、日本と朝鮮半島の近現代史を中心に特集を組み<sup>8</sup>、この中に「従軍慰安婦」問題も登場した。「日帝36年」の中では、名前を伏せた元慰安婦の朝鮮人女性がインタビューに答えており、第4回の「韓国から見た日本(2)」の中でもこの問題について、元軍医の証言や、顔を隠した元慰安婦女性のインタビューなどが取り上げられていた。この時代にこのような急進的なテーマを立て続けにテレビで取り上げることができたのは現在から振り返っても不思議であるが、様々なテーマを取り上げる何でもありの深夜のワイドショーであったからこそ可能であったのかもしれない。しかし、まだこの頃の元「慰安婦」たちは顔も名前もない存在であり、見る人に大きな存在感を示すことができなかった。

<sup>7</sup> 『テレビルポルタージュ 突撃一番～回想の従軍慰安婦たち』(TBS:1977)の中では、北九州に住む日本人元「慰安婦」が中心となっているが、朝鮮人「慰安婦」に関する言及もあった。

<sup>8</sup> この番組のトピックは多岐に渡り、韓国・朝鮮人の樺太残留問題、強制徴用、BC級戦犯、被爆者、関東大震災における大虐殺、在日の差別問題などが取り上げられた。取材は、日本国内のみならず、韓国の各地で行なわれ、被害の生き証人たちの生の声をおさめており、歴史を検証する上でも非常に重要な資料となっている。

さいごに、在日韓国・朝鮮人に関連する番組は、国際化やアジアの民主化、在日の定住化、3世の出現など、在日をめぐる環境が大きく変化したために、そのテーマが多様化した。80年に放送された『NHK特集 密航』（NHK:1980.5.16）は、韓国人密入国者の素顔に迫った番組であるが、当時取材許可を取ることが難しかった長崎県大村入国者収容所の中に入って取材をしていた。日本社会では全く知られていなかった密航者たちの生活や心情を取り上げたこの番組は、全国の視聴者に大きなインパクトを与えた。しかし、ディレクターの萩野靖乃によると、視聴率は上々で周囲からの反応も良かったが、視聴者の在日韓国人男性から苦情の電話を受け、その後芸術祭候補作品として出品することを辞退するほど衝撃を受けたという。82年には、『NHK特集 済州島～母なる島への帰郷～』（NHK:1982.10.18）が放送された。この中では、大阪の済州島を故郷とする人びとの里帰りツアーが中心となり、在日1世と2世、3世の世代間ギャップや現地の韓国人との葛藤などが描かれていた。しかし、ディレクターの瀧澤孝司によると、当時まだ軍事独裁政権下であった韓国での取材は困難に満ちており、自由な取材活動を行なうことができなかった。

このように、それまでタブーであった在日韓国・朝鮮人の問題を取り上げるには、日本の右派や保守からの攻撃のみならず、韓国政府や、当事者に近い立場の人からも圧力を受け、作り手たちは両側からの逆風に向かって番組作りを行っていた。

## 8. まとめ

この時代には、戦後日本の言説空間の中で、ベトナム反戦運動などをきっかけに、日本人のアジアにおける加害行為についても語られ始め、語りの主体は元日本兵などの男性から、銃後や空襲の体験を語る女性、本土復帰した沖縄の人びと、占領や植民地支配を受けたアジアの人びとへと順次広がっていった。テレビ全体の傾向としては、深刻な社会問題を扱うドキュメンタリーのような枠組みは、バラエティやワイドショーなどの人気におされ、深夜枠や地方局に追いやられた。しかしかえってその状況が、特定の対象にターゲットを絞った先鋭的な番組を生み出すことを可能にしたともいえる。

それまでタブーとされていた韓国人被爆者や「慰安婦」、在日韓国・朝鮮人などのテーマが現れ始めた「転換期」ともいえるこの時期には常に右派・保守派に加えて韓国政府や在日の当事者など、両側からの逆風があり困難に満ちていた。このような状況の中、作り手たちはタブーに挑戦し番組作りに取り組んでいた。「慰安婦」問題などを始めとする日韓の戦後補償問題などはこの後、90年代半ば頃まで非常に多くの番組が制作され放送されることになるが、70年代と80年代を通して、その「下地」ともいえる、作り手の問題意識やネットワークが形成されていたのである。

## 補注

本研究は、NHK放送文化研究所と東京大学大学院情報学環の共同研究「アーカイブを利用したテレビ・ドキュメンタリー史研究」（2009-2011）に参加し行なった成果である。

また本研究の一部の成果は、日本学術振興会特別研究員奨励費(10)の交付(2012-)による。

## 参考文献

- 大江健三郎(1970):沖繩ノート,岩波書店.  
 千田夏光(1973):従軍慰安婦：“声なき女”8万人の告発,双葉社  
 成田龍一(2010):「戦争経験の戦後史」：語られた体験／証言／記憶 戦争の経験を問う,岩波書店.  
 福岡良明(2006):「反戦」のメディア史：戦後日本における世論と輿論の拮抗,世界思想社.  
 尹明淑(2003):日本の軍隊慰安所制度と朝鮮人軍隊慰安婦,明石書店.  
 吉田清治(1977):朝鮮人慰安婦と日本人：元下関労働員部長の手記,新人物往来社.  
 Gluck,C.(2007):歴史で考える,岩波書店.  
 Halbwachs,M.(1950):La Memoire Collective,Paris:Presses Universitaires de France(『集合的記憶』小関藤一郎訳,行路社,1989)  
 Morris-Suzuki,T.(2005):The Past within Us:Media/Memory/History,London:Verso(『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』田代泰子訳,岩波書店,2004)  
 Thompson,P.(2002):The Voice of the Past:Oral History,Oxford University Press(『記憶から歴史へ：オーラル・ヒストリーの世界』青木書店,2002)